

これからのことを君に話すのは心苦しい。

君が如何に幸せになるか。そのこと自体で僕は苦しんだのだ。

でも、それでも、伝えないとわからない。

だから、君に最後の手紙として伝えよう。

もちろん、僕ははつきりとわかっている。この手段を君が望んでいないということを。

だけど、それが君を幸せにできる。それだけは事実だということをまずは理解してほしい。

ずっと考えていた僕たちの幸せを。

ふう。書くのはやはり、疲れるな。こんな堅苦しい書き方ってやっぱり嫌だよ、僕的には。でもいつまで続くんだろうね。僕と君が出会って幸せをお互いに模索していた頃からいつまで。独白口調は手紙にはよろしくないってことぐらいわかっているけどさ。

試しにここに書いてみようか。僕は幸せになれていますか？　みたいなことをさ。

わかんないけどさ。でも、それでも、僕が幸せになれたら君も幸せになれるんじゃないかな

あ？　って考えてみれば意外にあら面白や！　なんてことを思っています、はい。

でもねえ、こんなことをだらだら書いてしまうのってやっぱり楽しい！　疲れるけど。

いやあ、君の名前を忘れてしまわないように書いておこうと思ったけど、なんとなく叙述トリック？　だっけ？　それを使って敢えて伏せてみようと思う。

おかしいと思わなくてくれたら一番助かる。僕は幸せになれたのか？ 知らん！

さあ、ツツコミどころが満載のこの手紙がいつ君に届くんだろう。まだ、郵便なんてものがあつた頃から考えておけばよかったかもしれない。

でも、ホント、君の為に書いておくって怒られて以来かな？ 君に。

だから、一緒に暮らしていた時のことをこの手紙に綴っておこうかと思うんだけど、良い？ 誰ですか？ お前は馬鹿なことを言っていると思った人は。いや、君しかないじゃん！
っていうツツコミはなしでお願いします！

さあ、前書き的な文は終わりにしよう。ちょっと私情が入りましたが無視してください。
繰り返し書こうか。

これからのことを君に話すのは心苦しい。

君が如何に幸せになるか。そのこと自体で僕は苦しんだのだ。

でも、それでも、伝えないとわからない。

だから、君に最後の手紙として伝えよう。

もちろん、僕ははつきりとわかつている。この手段を君が望んでいないということを。

だけど、それが君を幸せにできる。それだけは事実だということをまずは理解してほしい。

ずっと考えていた僕たちの幸せを。

さあ、君が知らない事実から始めよう。もし、君に届くときがあつたら。そのときは。空を見上げて手紙を翳して。そのとき、初めてわかると思うから。

・事実その壺。

「君が知らない世界に花が咲いていた」

僕のお父さんは庭で花を咲かせていた。色とりどりの花畑は見る人を癒した。花畑を作ることが夢だった彼女は羨ましそうだった。僕は彼女に「見に来る？」と尋ねた。すると彼女は狂喜乱舞して僕を抱きしめた。僕と彼女の出会いには花畑が始めだった。

お父さんはガールフレンド（今は死語か）が出来たと喜んでくれた。

彼女の願いを取り入れた花畑は華が増えていった。お父さんはプラネタリウムよりも綺麗だと喜んでいて。

でも、彼女は僕が目的だった。元々は僕の為に花を増やしてほしい。そう思っていたらしい。だから僕がお父さんに言った。お父さんは彼女を大切にしなさいとは言わなかった。

嫌な家族だなんて僕は幼少期から思っていた。だって、

「お父さんはな、お前のガールフレンドに喜んでもらいたいんだ！ あんな花畑を作ったことを自慢したいぐらいだ！ だから、付き合いを止めることは許さないからな？」

こんな家族の中で暮らしていたから、彼女が羨ましかった。彼女を褒めて家族を褒めない。しかもその家族が付き合いを始めたのに。

僕は次第に気持ちが塞いでいった。だって、お父さんにもお母さんがいるのにどうして彼女を求めているのか。そのときの僕には全然わからなかった。いや、わからなくて良かったのかもしれないと今では思う。

ある日、彼女と街中を歩いていた。すると一軒の花屋にお父さんがいた。

「何してんの？ 父さん」

声に振り向いた父さんはしかめっ面をしていた。でも、僕達だと気付くと笑顔になった。

「おお、雪菜か！ 久し振りだな！ ここで会ったのも何かの縁だ！ 雪菜が花を選んでくれないか？」

違った。僕達ではない。彼女に言ったんだと気付いたから虚しくなった。僕は何のために好きな人と居るのだろう？ という疑問に襲われて泣きそうになった。でも、ここで、泣いたら哀しむ。だから黙って選んでいる彼女を見ていた。

その日の夜。僕は、彼女とは付き合わないことを決めた。もう彼女に被害を与えたくない。そして何より。

僕がずっと苦しむから。

だから、その日からスマホの電源は切った。そして電話番号を着拒指定をした。だから、その日から気付けべきだったのかもしれないと思った。なぜなら。

彼女がずっと苦しんでいるから。

きっと、僕は不幸者なのだろうと思う。でも、これが最大の幸せの条件だと思ったから。だから、彼女が入院していたなんてことに気付けなかった。その日から、僕と彼女はすれ違い始めた。

・ 事実その式。

「入院しても親が来なかった本当の理由」

僕は幸せな人生を送っていたと思っていた。お父さんには気にいらなかったけど、彼女を幸せにできた。そう思っているから僕は庭を見ていた。楽しそうに庭をいじるお父さんが僕には耐えられなかったけど。いずれにしろ、もう過ぎ去った話だと心から思っていた。

でも、ある一通の手紙が届いた。差出人は彼女であって、彼女ではない人だった。乱暴に書かれている字が乱雑だった。

僕の心を打った言葉があった。

「あなたのお父さんは私の入院を知っているのになぜ来てくれないのかしら」

僕はすぐさま、お父さんに詰め寄った。庭をいじっているお父さんは僕に目をくれなかった。でも、手紙を見せたら表情が固まった。僕も固まってしまった。

「お前、ガールフレンドが嘘を言っているなんてことを考えないのか？」

みたいなことを言いそうな表情で固まっていた。僕は泣きたくなった。

病院に入っているのに彼女の両親はお見舞いに来なかった。その事実だけで僕の心は奮い立った。

家を飛び出してバス停に行く。いつもの待ち合わせの場所はここだからだ。

「あれ？　なんでいるの？　咲夜。私、もう誰も信じられないって思っていたのに」

これじゃあ、何のために病院を抜け出したかがわからないじゃん、と少しだけ哀しそうに僕

を見つめる。

「手紙なんて書いてないよ。咲夜が一番知っているんじゃないの？　だって、形に残したら必ず未練が残るんだから」

僕の心に突き刺さる言葉が執拗に傷つける。でも、諦めたくなかった。僕の言葉も遠く、そして彼女の心が離れていたということに。

「なんで、咲夜って言っているかわかる？」

彼女は澄ました顔で僕に問いかける。その言葉の意味は僕にはわからなかった。

「だって、今日が別れの日だから」

そして、笑顔を浮かべた彼女を僕には何もできなかった。そのまま、僕の前から一言も言わずに立ち去った。後に残されたのは絶望に苛まされるであろう未来に打ちひしがれた僕だけだった。

・ 事実その参。

「ずっと幸せになりたかった君に授けた想い」

僕は家に引き籠るようになった。お父さんにもお母さんにも彼女にも裏切られた。その想いでいっぱいだから、引き籠るようになったと誰もが思っていた。でも、僕はそうじゃなかった。

だつて。

君が笑顔を振り向いて僕に幸せをくれた。

君が手をつないで恥ずかしげに顔を赤くした。

君が「幸せだよ？　当たり前のことを言わせないでよ。恥ずかしい」つて僕にキスをした。

そんな思い出が沢山ある君を忘れることが出来る？

僕にはできなかった。僕にできることじゃなかった。僕には忘れることが出来るわけがないじゃないか。

「雪菜。君の最期は僕が看取るよ」

もう、思い出と共に始まった君の人生を僕は無駄にしたくなかった。だから、君を最後に幸せにしよう。そう思った。

心の奥底から好きな君に送れる物がある。それを最後に君を忘れよう。そう思った。

その思いだけで充分だった。僕は君に幸せを送ろう。

その思い出だけで充分だった。君が僕から離れていく理由として。だつて。

死に化粧をさせてくれるって、花畑をすることと同じなんだから。

僕とのいつもの待ち合わせ場所ですと待っていてくれたんだね。

僕との思い出がある、この街から離れたかつたんだね。

僕と作りたかった、綺麗な花畑を見たかつたね。

だから。

君を必ず忘れないように努力しようって。

そう思ったんだ。

どうして、君は嘘として隠していたの？ 鋭い僕の勘が外れるとも思った？
でも、良いんだよね？ 僕と付き合った季節はもう忘れることはないんだから。

一緒に手をつないだね。

一緒に歩いたね。

一緒に花を見たね。

僕は部屋にある録音機材に手を加えた。曲作りから始めて、ゆっくりと動画も作っていく。気付けば君が重体になっていることも知らずに完成した。

僕は勢いよく部屋の扉を開いた。手に出来た、君に遺すものを渡す。ただ、それだけの為に君が入院している病院まで走った。

ここまで書けばわかるかな？

君が幸せに生きている「今」を約束して、そのまま継続するって難しいことかな？ でも、僕は君を幸せにできるって信じている。

この手紙をここまで読んでくれだけでも嬉しいのに。でも、君が呼んでいるって聞こえた気がしたんだ。だから、ありがとうと言うのもちよつと筋違いかもしれないけど、少しは為になったらしいなって思うんだ。ただ、今でも僕は悪夢を見てしまうんだ。驚くほど精緻な夢を見てしまうんだ。

だって、君がいない世界なんて何が残されているんだい？

僕は君の為に生きるって決めたときからわかっていたことなんだ。そして僕は、決めたんだ。あの日の君を信じてみるってことに。

それだけ虚しい世界の中で生き続ける。僕だけ取り残される孤独に勇氣を持っていけないといけないうて。

僕の心は決まっている。だから、君と知り合えた時のことも書いておくよ。

君がまだ、はにかんで笑っていた頃と純粹だった僕の為に。

・事実その四。

「二人の最も幸せだった頃」

彼女を知ったのは随分古ぼけていた頃だった。言葉に出せない悲しみを日記として書いていた頃だった。日記に書かれていた文字は乱雑で読めなかった。

ただ、日記にタイトルは付いていた。

「もし、君を知っていたなら」

僕はタイトルを音読して確認した。綺麗な文字が書けない僕はゆつくりと日記を閉じる。同時に目をゆつくりと閉じた。

僕の中に誰かが潜んでいる。感じていると。瞑想をしていると。無念無想になっていると。彼女のイメージがはつきりと浮かんた。星屑と共に降り止んだ雨の音は止まない。リズムカ
ルに叩いている雨に手を翳す。やがて、ゆつくりと濡れていく、僕の手を誰かが掴んだ。

驚いて、目を開くと、そこには彼女がいた。

「君は？」

どこから来たかわからない、白装束に身を包んだ彼女は僕に笑いかけた。

「貴方は？」

くすくす笑う彼女の頬を雨が叩いていた。

「こんな時間に。貴方も変わっているわね」

一つ言いたかった、と思っていたら口から出ていた。

「寒くないですか？」

やっぱりくすくす笑う彼女は部屋に入り込んできた。今更だが、イメージしていた人とは違っていた。

バスタオルが一枚傍にあつたのですぐに渡した。

「いやあ、女性の濡れている姿を見てるって酷いと思うんですけど」

「そんなことには興味がない。そして君がどこから来たのかを知るためには仕方ないことだ」

「なにそれ。いいから、こっちは見ないでくださいませんか？」

わざとらしいウルウル顔に思いつきりタオルを投げた。だが、そのタオルはふわりと浮かんでしまった。え？

「君は魔法でも使えるのですか？」

「まだ敬語？ 充分に私は貴方と同じ年なんですがね」

「君は魔法でも使えるのですか？」

「まだ敬語？ 充分に貴方と同じ年なんですけどね」

「君は魔法でも使えるのですか？」

「まだ敬語？ 充分にあんたと同じ年なんですが」

「君は魔法でも使えるのですか？」

「あんた、虚しさって知らない？」

「君は「うるさい」しません」

とりあえず彼女は怒っているそうなので黙る。でも、なぜか、ファンタジーには定番のキラキラやないかなと思った。というか、白装束で女性と叫びたら天使しか浮かばない。

その天使らしき者は身体を拭きながら笑いかけてきた。怒っていないのだろうか。

「でも、貴方も大変ね。こんな家族に包まれて暮らすなんて」

「と言いますと？ 前世で君に出会っていた可能性は否定できないことは確かだと思うが」

「あんたはそんなキラキラやないはずですが」

「と言いますと？」

「だって、それ、正解だし」

「は？」

固まるよ、そら、と思つてしまつて實際二の句が継げなかった。

「私はその頃から次元を渡つて来たんですよ。因みに天使とか悪魔じゃないから安心して」

「いや、そのことにどう安心しろと？ 目の前にいる人が天使じゃないって思うって当たり前じゃないの？」

「うーん、まあ、そこは人それぞれでことで勘弁してください。とにかく、私は貴方が私と出会つてしまう前に私はいなくなつてしまうのよ。それを伝えに来たのよ。もしね、貴方が花畑に包まれてしまう時があつたら、その時はもう手遅れつてことなのよねえ」

「どういふことですかい？ なんとなく詐欺師がいるような氣もするのですが」

「詐欺師がこんな美しいだなんて貴方はとても幸せね」

「またもや、くすくす笑う彼女はでたらめを言っている。そう理解するしかなかった。」

「とりあえず、身体を拭き終わつたら歸つてくれ。僕はこの日記を書き続けたいといけないんだ」

「その日記のタイトルつてさ。いつか意味が来るんだろうね。私にはわかるの」

「未来から来たつていうオチ？」

「そりやそうですよ。だって、その日記に全てが籠められているんだから」

「全て？ なんの？」

「私と貴方の全て」

「なんかの本のタイトル？」

「べし」

痛い。殴らないでほしい。いや、はたかれた？

「とにかく、今からついてきてほしいんだけど、時間はあるはずだから行きましょう」

「きちんと人の意見を聞いてから行動するって学校で習わなかったか？」

「べし」

痛い。はたかさないでほしい。いや、殴られた？

「いや、間違っていないでしょ。でも、どこに行くの？」

「私の入院先よ」

そして、僕は彼女の羽根を見た。ゆつくりと空を飛んでいる妖精だ。そう思った。

ふわふわと浮きながら彼女と他愛のない世間話を交わした。不思議な体験で怖いとは全然思わなかった。どうやら、彼女は周りには見えていないらしい。僕はアブナイ人じゃないよ！と叫びたかった。でも、彼女は喋りまくってきたので仕方なかった。

道中、アイスクリーム屋さんや、八百屋を冷やかした。結構、近所には名の知れた僕だ。だから、軽蔑の視線なんて怖くはなかった。だって、もういなくなるつもりだったんだし。だから、彼女が連れに来たんだって思っているし。

「ここだよ」

歩き続けてどれくらい経つただろう、と思った。僕は終わるつもりで廃病院を見上げた。

「ここつて、昔は偉そうなお医者さんがいっぱいいたところじゃん」

「そうよ。でも、貴方つてその偉そうなお医者さんの家系に産まれたんでしょ？」

「そうだけど。ここで君と出逢つたなんて、そんな大袈裟なことは言うつもりはないけど、覚えてないんだよな」

「そうなんだ。でも君のお父さんに出会つて花とかを買っていた姿は入院先の窓から見てたけどね」

「へえ、そうなんだ。というか、やっぱり君がいたんなら、僕もこんなに早く終わらなかつたんじゃないかな」

「それを止めに来たわけでもないし、それを行つてもいいし。どっちでもいいよ。でも、伝えたいことがあつてね。それをここで披露しようかなつて、思つてね」

「と言いますと？」

彼女と話しながら「橘 雪菜」と書かれているプレートの病室に入っていく。廃病室はあらゆるものが廃れてボロボロだった。綺麗な星屑が見える夜空がゆっくりと明けていく。

「ここにね、私と貴方が最期に指切りげんまんをしたのよ。覚えてない？」

「うーん、覚えてないかな」

「そっか、残念。なら、これは？」

廃病室の奥にある、シーツが剥がれているベッドの横に、生け花があつた。植物を模しているから水やりとかはいらない。何本も差されている大きい缶に僕の文字が書かれていた。そして驚いた。

「もし、君を知っていたなら」と書かれていた。

「え？」

そう驚いたときはもう、彼女の姿はなかつた。僕はただ、ここにいたという事実を知つた。

・ 事実その伍。

「もう、君とはサヨナラを」

僕が病院に行つた時に。もう終わつていたことがあつたんだと後で知つた。

彼女はもう、一緒にいられないと思つた。僕は彼女を知つていたんじゃないのかと思つている。でも、それはもう過ぎたる答えだつた。

二人でいるときの君はホントに幸せそうで。

二人でいるときの君がホントに憎くて。

だから、君が、嫌なことをしている僕を憎くて。

だから、僕が、嬉しいことをしている君が幸せそう。

僕達の仲を壊したのは何でもない事実だった。

それは。

一緒に咲かせた花畑に二人でいること。

だった。

そんな夢を見ていた僕は病室にいる君をそっと抱き寄せた。

憎い君。

幸せそうな君。

憎い僕。

幸せそうな僕。

そんな二人がいられる時間はもう少なかった。反応もしない君を病室から連れ出そう。

それが最初で最後の、僕たちの約束だった。二人でいられない時間なんていない。

なら、僕も君も同じ場所で終わっても良いんじゃないか。

まるであの時に等しく、廃病院で終わろうとした僕たちを祝福してくれているかのようにだっ

た。

僕のことを名前で呼んでくれてありがとう。

僕のことを大切にしてくれてありがとう。

君を愛する僕を憎いと思ってくれてありがとう。

一緒にいられた時間を作ってくれてありがとう。

たくさんのありがとうの中に包まれた憎しみと愛を僕は知りました。

そしてそれが次の幸せに続いていくって思っているから。

たとえ、この世に未練がなくても、違う場所でまたやり直せるって信じているから。

僕は、君を愛し。

君は、僕を憎み。

僕は、君を憎み。

僕は、君を愛し。

そして幸せを掴もうと必死だった僕たちは。

今でも共にいられるのかな？

一緒だったってことは思い出の中で咲いている花なのかな？

生け花と同じ花が僕の庭に咲いているなんて。

僕も病院に入院したよ？ プレート隣の隣に僕の名前が書かれていたよ？

廃病院で教えてくれた君が妖精なんかじゃないって信じているから。

僕たちはいつまでも一緒だと証明してくれているじゃないか！

その廃病院が取り壊されるまでには、僕と君は一緒にいられるんだね。

だって、プレートに書かれた事実だけは変わらないんだから。

傍にあつた、バスタオルはもう、ここにはないけれど。

一緒に使ったタオルなら、君の前に置いたから。

受け取ってほしい。

共に咲いた花を雪にたとえた、

雪月花を。

僕はまた、君の面影を探しているのかもしれない。だから、あの時あつたこの事実を覚えて
いるなんて。どうして、僕のお父さんはあんなにも君と離れるなって言つたんだろう。

今ではなんとなくはわかるんだけど。

それでも、一緒に探した幸せはどこにでもあるのかな？

誰もが一緒に探すものは同じだ。幸せじゃなくても小さな喜びじゃなくても大きな哀しみじ
やなくても。

でも、それでいいって思えるのもまた事実。

だって、君は僕のことを好きでいてくれたよね？

妖精になってまで、僕に事実を教えてくれたんだから。

廃病院にあった、僕が渡した花が命みたいに見えたんだから。

あれは、本当に君の使い魔だったのだろうか。妖精は喋れたかな。覚えていないや。

僕は君にまた、嘘をついてしまうのかもしれない。

だから、一緒に探していたなんて面白みのない冗談だ。それでもいい気がするけれど。

あの廃病院は近日取り壊されるって聞いたとき。

「大丈夫、あの生け花があるから。僕たちの絆は結ばれているんだ」

そう思った。そう思えた。そう思ったからこそ。そう思えた。

そしていつかは終わる人としての役目を大切に担ってくれた、身体はもういらない。

ゆつくりと羽ばたいていこう。空へと、鳥の様に、どこまでも広がる世界に羽ばたいていく

んだ。きつと鳥は自由を知っている。だから、この空を飛べるように作られたんだ。

生け花はきつと咲き誇ると思える。だって、人の想いを宿すってどこかで聞いたことがあるから。

だから、僕は。

君に逢いに行つて良かった。

そう思っているんだ。

・後日談。

「もし、君を知っていたなら」

この日記に最後まで君のことを書いて良かったのかな。君がいなくなってもうどれくらいの日々が過ぎただろう。長い年月が経ったとも思えるし短い時間が流れただけかもしれない。どちらにしろ、僕の眩きとやらがもう終わっても良いと教えてくれているのかもしれない。

ここに書いたことは全て事実だ。だけど、少しだけ脱色している点もある。でも、その説明は不要だろう。そのことについて言及する必要はないと信じている。

ところで、最近僕のお母さんがお父さんに離婚を迫ったらしい。らしい、というのは僕が直接聞いたわけではないのだ。何かしらの言い伝え通り、時が過ぎたら別れをしなければならないうというのはお母さんの家系に続いているそうだ。僕も君に対してはしたのかもしれない。

さて、僕はこれから君のところに行く。その過程で僕の幸せがあるのかはさておき。

僕の心は決まっている。君を愛した人を大切にすることは必要であろう。だから、この思い出も一緒に伝えに行こうと思う。

きつと君が喜んでくれる花を授けよう。そう思っている。僕のことを今でも覚えていてくれ

ているかな？

長く続いた日記もここで終わりだ。僕が記したことがどこまでホントで嘘かは見つけた人次第だ。でも、これだけは言える。

君も仲間だろう？

雪菜も咲夜も今ではどこにいるのかはわからない。でも、ここにはいない。少なくとも僕が書いたと思える証拠はもうどこにもないのだから。

僕たちは結論から言う和幸福な人生を歩めたんだろうと思う。それは確実だ。だけど、僕たちはまた、離れ離れになっちゃった。だから一緒にいられる場所ですつと待っている。

きつと君は来てくれるから。きつと君が居てくれるから。きつと君の幸せを運んでくる渡り鳥だから。

僕は、これからどうしようかな？ ただ気ままに生きようかな？ ただ在り方を変えてみようかな？

わからないけど、楽しいのは事実だ。もう、誰かを気にかけて心配する癖はやめないといけないなと思うから。だからと言って忘れるのもよくないから考えよう。

雪菜と咲夜以外に誰がいるんだ、って？ さあ。誰なんでしょうね。でも、誰にでもあるん

じゃないのかな？　こういった日常的な疑問っていうのは。

もしかすると、僕は咲夜じゃないかもしれないし、彼女は雪菜じゃないかもしれない。でも、ここに書かれている人生を歩んだ人がいる。それだけは事実の羅列のこの日記を読んだあなたならわかるかと思う。こんな長い嘘を書く人がいるかな？　それともどこからか引用した長い小説の様に思っているのかもしれないね、あなたは。

でも、良いんだよ。それで、人生という、儚い陽炎を歩むんだよ。人はそういった生き物だ。たとえ、未来が絶望だろうが、過去に希望があろうが、生きるということは自分に責任を持つて前に歩んでいくことなんだから。

その先には人それぞれの今がある。現在がある。その今を必死に生きる。それが大切だ。もしもね、君がそんな前にも後ろにも行けない状態になったら、こう考えてみてほしい。

今を生きずんば、今に去れど？

意味わかんないね、はい、説明します。

まず、直訳的に言くと、

「今を生きなければ、今は去っていくのではないでしょうか？」

的になるんですけど、この二つの「今」は意味が違っていて、始めの「今」は実感がある自

分ですね。そしてもう一つの「今」はその実感に続く「その先」ですね。

「今」を必死に生きていると実感が湧く。そして「今」から続く「その先」に自分を考えたり自分を見つけた。 「今」には未来と過去が含まれているって言っても過言ではありませんね。そんな感じで考えていくと、一つの答えがありますよね。

必死になれば未来も過去も変えられるということに。

そりや過ぎ去ったことが変わるわけないし、確定もしていない未来を変えるなんて、何言ってるの？ つてなりますけど。でも、そういう意味じゃないのはもうお分かりですよ。

言い方変えれば未来を見る目が変わり、過去を見つめていた目に視点が增える。

つまりはそういうことだったのです！

とまあ、日記らしくないよくわからないことを書いていますが、少なくとも僕たちが行ったことはこれらに等しいのではないでしょう。 いや、聞いてどうすんの、自分。

一生懸命に生きる姿が美しい。まとめてみるとこんな感じにこの日記もそう伝えているかのようです。

さて、僕はそろそろこの日記を終わらせよう。

どんな人がこの日記を読んで、どんな想いになるかはわかりませんが。

少しでも、貴方にも幸せが与えられたんならそれはまた、筆者冥利に尽きますね。

さあ、僕も行こうか。

待っててね、雪菜。

今から行くから。

はあ。長かった。無駄に長かった。

この手紙にまさか、自分の手記を引用するとは思わなかったよ。というか事実がこんなに含まれていたら君も驚いただろうね。

だって、妖精とかホントにいたなんて雪菜は信じないだろう？ 僕だって信じないさ。でも、

雪菜がもう、死の間際に僕に伝えに来たって妖精は言ってたから、雪菜が好きな雪月花を送ったんだから。

いや、なんてファンタジーなんでしょうね、ホント。

僕も雪菜のように遺すものがあればなってると思ったけど、この手紙に添えようとした手記を用いて雪菜に届けたい想いが伝わればって、震える手を押さえて書いているよ。

雪菜は残さないで消えたいと思っているのかもしれないけど、でも、僕が勝手に雪菜が普通だけど、人生を楽しく過ごしたってことぐらいは遺したほうがいいって思ったから。

きつとね、これは運命と宿命の二つが僕たちに襲い掛かったんだよ。だから、僕たちは幸せ

になれたかなって思うぐらいでちょうどいいんだと思う。

だから、これがホントにファンタジーで全てが夢だったらって思う。僕だって、死にたくない。

でも、雪菜が隣で花屋で花を選んだのだって、手紙なんて書いてないっていうホントのこと
も、雪菜を最期に看取ったことも、妖精が雪菜の部屋まで案内して雪月花を見せてくれたこと
も、僕の手記も、全てが事実なんだから。

もう、苦しまなくてもいいんだよ。

僕も雪菜も、もう苦しまなくてもいいんだよ。

そしてこれからも幸せになれるのなら。

少しでもだけ贅沢を言うのなら。

雪菜と僕が手を繋いで花畑で仲良く話したい。

今でもそれだけが出来なかったことが後悔している。
きつと、僕たちは。

来世でもまた、巡り逢えたら。
そのときはまた。

君が傍にいて笑ってくれたら。

これ以上の幸せはないって。

信じているから。

ずっと続いていく、この連鎖を。

誰も止めないようにと切に願っている。

僕たちも。

貴方達も。

きつと、続くはずだから。

たとえ、生きていようと。

たとえ、泣けなくなろうが。

それでも、僕たちは。

回り続ける。

運命も。

宿命も。

そしてラストレターは。

ここで終わるんだから。

そんな内容の手紙が宛先も書かれてない封筒に入っていた。

警察はその手紙を遺書として扱った。その手紙を読んだ両親は泣き叫び、当惑していた警察はただ慰めた。

そして両親は決めたそうだ。

この手紙に書かれている雪月花を我が息子夫婦の部屋に飾ってあげようと。